

聖語編 智慧の言葉

- いっさいの實在は神なる一元より發生したのである。われわれは神の中にいる。常住神を離れることはできない。だから神に近づくとは一歩一歩、いろいろの工夫を凝らして神にまで攀じ登ることではない。工夫という私の計らいがなくなった時、そのまま神の中におり、神に一致し、神のままに行爲し生活して自分を見出すのである。
- 西行法師の歌「雲にただこよいの月をまかせてん厭うとしても晴れぬものゆえ」雲に捉われていては晴れようがない。しかし月の方から見れば常住名月である。
- 家の中にいて自分が濡れていないのに、外の雨が気になるのは、心が雨に捉われるからである。
- 濡れるのは、雨の音に驚いて「実相の家」から出て見るからである。外のために傷つくのは自分が外物に捉われるからである。
- 真理への道はただ一つ——人間は神の子だ——ということである。
- 神は「人の心」を悪に造らない。悪い心は「人の心」ではない。人とはそんなに悪いものではない。なんじが「悪い心」を顕わしているということは、それがなんじがそこに本當にあらわれていないということである。

○ 「薬劑の法則というのもニセ物の法則であるから「実相の人間」が自宅（体）へ帰って来れば効かなくなる。実相の人間がその家に近づいても、まだ本當に帰りついていない間は「薬劑の法則」が本物顔に幅をきかす。

○ 神をもっと尊べ。神のみが造り主だ。神から出たものに悪があると思うな。神から出たものに 病氣などという不完全なものがあると思うな。

○ ありがたい生活はよいが「病氣はありがたい、苦難はありがたい、貧乏はありがたい」と被虐待淫乱的な虐待せられることばかりをありがたがる信仰は本當ではない。

○ 報償を求むる愛も、喜んで欲しい愛も共に「我」がある。「自分がこうした」「自分がああした」「しかるに彼は」というふうに、「自分」というものを脱げきっていない愛である。

○ 家庭の葛藤は、執着の愛から起こる。舅 姑 と嫁同士や夫婦親子間の紛争はすべて「自分 がこうしてやったのに」という「我の愛」から起こるのである。

○ 内に宿る神にたよる者は幸福である。彼はあらかじめ恐怖しない。彼は取り越し苦労をしない。内に宿る神とは実相の我である。

○ いつも手術台上である。明日はないと自覚せよ。

○ 何物かに値するほどの人間は彼自身のうちに、永遠の向上を目指して自己を駆り立てて止まない力を自覚する。

○ 生命の本来は働くことである。生命は働くことで生長する。「必要」と「多忙」とに感謝する者は生長する。

○ 思想は時として天上から降ってくる。あるいは地下から

予期もしない時に湧いてくる。その思想は時として靈界からの放送の感受でもあれば、自己の神性からの噴出であることもある。天上の思想も地湧の靈想も時間を超越している。すぐその時、間に合わなくとも捨てるべきではない。忘れてしまえば二度と想い出せないような思想に価値あるものが多いのである。しばらく

筐底に埋めておけばやがて現実の用途に花咲く思想もある。「想」は現実に先だち、「想」あって現実が芽生える。

小さな思想の手帳を常に懐中しておき、「想」起こるに従ってそれを簡単に書き止めておくのは良い方法である。

○ 他を羨むな。自己の現在に満足するな。自己の奥にあるところの無限の宝を羨んで、その無限性を掴むべく突貫するのが最も自己成長の道である。

○ 思想はこれを紙に書くときいっそう深まる。計画もこれを書き下すときいっそう微細のところ注意到行き届く。書いてみると精神が統一する。書いてみると分析と統一とが同時に行われる。

○ 一つのものにでも執したら、苦しみはそこから始まる。本来自由自在な自分の心を、自分の念で縛ることになるからである。

○ 罪は罪自身によって罰せられる。いわば罪自身の重さによって壊けるのである。

○ いかにも多くの人々が毎日自分を傷つけていることである。憤怒、憎悪、恐怖、罵詈訾——その他すべての悪徳は自分を傷つける。

○ どんな低い「生命」でも拝めば神性を發揮する。「稲荷の

正体」とか「八幡の正体」とか中途半端なところまで解剖して、悪口や軽蔑することや、排斥することを教える靈学者は憐れむべきだ。

○ 物を生かして使え。しかし生命はもっと大事だ。物を大事にしようと思つて人間を不大事にする者は本末を顛倒するものだ。一枚の皿を破ったといつて人間をガミガミ叱るな。人間は皿より尊い。

○ 頭に浮かんだ思想感情はラジオのように宇宙に波及する。表情でかくしても、意思で押さえても心をかすめた思いは風媒花の植物の種子のように飛んでいつてどこかで生える。

○ 一つの「生命」は地上なる肉体を選んで這入ってくる。き、その受くべき苦しみをあらかじめ知りながらその肉体に宿ってくる。受苦の多き生命ほど「高速」の進化をとげる。

○ 外物かえてみても心が変わらねば人間は幸福にならない。人間の幸福は心の中にある。幸福を思えば、幸福の心の波がおこり、幸福の心の波が起これば、世界の幸福の波長が集まってその人の周囲に具象化する。

○ 他を押し上げる努力は何よりも貴い愛の道である。坂道をのぼるのに苦しんでいる荷車は後から押しやれ。合う人ごとに一歩でもその人を押し上げよ。なんじの魂もまた押し上げられるであろう。

○ 神にちかづく道は一歩一歩小善を積むにある。

○ 苦しくても逃げだそうと思ふな。自己が置かれている境遇が、自己のたましいの生長に最もよい栄養であるのである。たましいがその境遇から得られるあらゆる栄養を吸い

とったとき、別の境遇がおのずから開けてくる。

○ 天の愛と地の愛と。父の愛と母の愛と。天の生氣と地の生氣と両々そろって万物は育成するのだ。

○ 左（火足）はこれ天の愛、右（水極）はこれ地の愛。合掌はこれ天地の愛。合掌して天を指し、跪いて座を地に順わしむ。天地の生命が合掌ありありと生きてくるのである。

○ 地の愛はこれ横。天の愛はこれ縦。――はこれ十字。十字はこれ火水。火は縦。水は横。火水（陽陰の原理）は神にして万物を造りたまう。

○ 罪が真に実在であり、真に実体があるならば阿弥陀仏でもキリストでも祓戸四柱の神でもこれを消滅することはできない。これを消滅することができるのは実在でないからだ。

○ この身このまま救われているという「この身」とは迷いの肉体のことではない。誰にでもある本当の自分、実相身、実在身、金剛身のことだ。迷いの肉体は救われるも救われぬも無い。

○ 薬と病気とは同じ種類のものである。類をもって集まるのが心の法則であるから薬が好きな人のところへは病気はおのずから集まる。

○ 愛に一時報いがないように見えても愛の力を疑うな。愛した相手に叛かれても愛の力を疑うな。すぐ結果が出るような功利的なものよりも大きな果を愛は結ぶのだ。

○ 愛はすべての物に調和と平和とを齎す精神波動である。この世に隠れたる愛がなかったらもつとこの世は悲惨であったに違いない。愛の精神波動は永遠に消えないでついに

神のみ許に達するのだ。

○ 今まで注がれた愛でいまだ一度も無駄であったものはない。愛はこの世で花を開いて皆の者に喜ばれ、神の国で実を結ぶ。

○ 愛せよ、少しも求めずに愛せよ。これが愛の秘訣である。結果をもとめた愛は必ず不幸に終わる。

○ 他人を我で自由にしようと思うな。自分で自由にしようとして自由にできる物は一つもない。しかし自分で自由にしようとしよと力まないようにすれば、なんと不思議、すべてのことが自由にらくに運ぶのである。我がなくなるからである。

○ 悩みを数えるよりも、恩恵を数えあげよ。なんじはそんなに賜が多いのになぜ、呟くのだろう。不健康にならなければ健康を感謝しない者には不健康が来り、囀る鳥が飛び去らねば囀る鳥の妙音を賛嘆しえない者の庭からは、囀る鳥は飛び去るのである。生長の家の生活は、感謝の生活である。

○ 神はなんじの善き行いの中にある。愛の中にある。善き生活の中にある。それは形なき形である。真理である。道である。

○ ことを成すのは結果の顕われんがためではない。生命が鍛えられ、強くなり、いろいろの経験を得、豊富になり、多くの人々のそれぞれの立場を理解し、すべての人に対する理解を深めて、本当の意味における愛を成就し、本当の意味における自己の生活を成就せんがためである。苦勞したものでないと人を本当に愛することができないのは、い

ろいろの立場におけるそれぞれの人間を本当に理解できないからである。

○ 自分だけが助かりたいという心は、全体（ミチ、満ち、道）と離れた心である。「道」の無いところには荊棘が生え、運命は悪くなる。

○ 薬剤の広告や栄養剤の広告はなるべく見ないがよい。それを見てみると釣り込まれて薬剤や栄養剤が欲しくなる。それが欲しくなれば、その欲望を満たしたい潜在意識が、内部からその薬剤や栄養剤を必要とする病気を造り上げる。潜在意識が求めた薬剤に出会したら満足して病気を引っ込める。薬剤や栄養剤の広告は病の作り手であるから見ないがよい。

○ 報酬とは人間から貰うサラリーのことばかりではない。神から頂く報酬もある。その人自身の発達ということこそ、神から頂くいっそう大切な報酬だと知らねばならぬ。物質的報酬は「主」ではなく随伴物にすぎない。

○ 真実の自己を発見することが、いかなる他のものの発見よりも偉大な発見である。「真実の自己」——それは神であり、全能者である。

○ 一つの憎みは十人の憎みを招び、一つの愛念は百人の愛念を招ぶ。

○ 本来自己のうちにはすべてがある。ただ見出だせないだけである。

○ あらゆる成長は、外からの獲得ではなく、内部に宿っているものの新しい発掘である。経験とは外から得るものではなく、外から触れるものに触発せられて、内部にあるも

のが出て来るのである。

○ すべての罪のうちで、神を信じないのが最大の罪である。

○ 迷っている仮我が悟って真我に進化するのではない。仮我が消えて真我の実在がよくわかるのだ。

○ 修養は「迷っている我」を存在すると見立てて、その迷いを消すべく努力することである。悟りは「迷っている我」は無いと悟って「迷っている我」が自然に消え去り、「常楽の我」が自然に顕われる。修養は努力であるが、悟りは易行である。

○ そこに地獄があるのではない。なんじの心が地獄なのだ。また、ここに見よ、かしこに見よというて極楽があるのではない。なんじの心が極楽なのだ。

○ なんでも来い、皆受ける。受けてそれを自分の生長の肥料にしてしまう。苦痛よし、不幸よし、あるものすべてよし、そう思ったとき、不思議にも苦痛も不幸もなくなっている。

○ 何事をするのも皆自分に帰って来る。他のためだと思つてゾンザイにしていると結局自分の運命が悪くなる。

○ 真のその人の生長は日常生活でまゐる。

○ デリケートなものにはデリケートな扱い方をしなければならぬ。ピアノを金槌で叩くものは愚者である。ピアノの鍵盤にはデリケートな指を必要とする。しかし、釘を打ち込むのに拳で打ち込む者は愚者である。人を使うにもすべからく相手がピアノであるか、釘であるかをみわけねばならない。

○ 自分だと思つていたものが自分でなく、他のこだと見え

- ていることを為すところにかえって本 当の自分が出る。
- 「自分に反対だ」と思っている相手は、本当に自分を生かすために動いていてくれるのである。歯車の噛み合いを見るがよい。自分に接触している歯車が自分の反対方向に廻るので自分は正しい方向に廻転できるのである。
- 幸福とは神のみ心に従って生きることである。神の実現である。そのほかに人間の幸福はない。
- 言葉の槍ほど恐ろしいものはない、昔から言葉の槍で刺し通された人の数はいかなる戦争の犠牲者よりもおびただしい。
- 偽善は偽悪よりもいっそうよい、善に習うもののはついに善になってしまふ。悪の真似をしている者はついに悪になつてしまふ。
- 人間は虎ではないから大声で怒号する必要はないのである。愛の言葉で諭せば解るのである。
- わが神は愛の神、知恵の神、生命の神である。われらがその神の子であると信ずるのが本当の信仰である。この信仰に立つとき、われらは不動の堅信を得るのである。
- 良人も捨て妻も捨て子も捨て、天地唯一つも自分のものはない、神のもののみだと知ったとき、良人は従い来り、妻は従い来り、子は従い来るであらう。捨てるとは自分のものでないと知ることだ。